

学会報告奨励賞選考報告

栗原成郎

1993年度の研究発表会では全部で18本の報告がなされたが、このうち学会賞の審査対象となった若手研究者の発表は16点であった。いずれも内容豊かで、配布資料の点でも詳細で情報量が多く、よく準備された研究であり、司会者の評価も概して高く、一般に好評の報告が多かったのは、喜ばしいことであった。

学会賞選考委員会は2回にわたって開催され、16点の報告を、学問的重要性、テーマの斬新さとインパクト、論旨の明確さ、論理の展開の適正さ、論証の説得力、関連分野に関する十分な知識、発表技術の角度から、慎重に検討した結果、研究成果の卓絶性の面において優秀賞に該当する秀抜な発表は、残念ながら、今回はなかったが、次の3点は、いずれも甲乙つけがたい秀逸な報告として、順位なく、奨励賞に値すると判断された。

武田昭文氏「フレーブニコフのドラマチズム—詩劇『アトランティスの滅亡』をめぐって」

臼山利信氏「述語的用法における形容詞長語尾形および短語尾形の意味特徴について—「一時的特徴」、「恒常的特徴」表示のしくみ」

野中進氏「バフチン論：〈我〉／〈他者〉と〈我〉—〈汝〉の二つのモデル」

武田氏は劇的長詩『アトランティスの滅亡』の構造分析を通してフレーブニコフのドラマにおける「声の演劇」の特質を明らかにし、テキスト解釈において独自の見解を示し、その内在的優位性が高く評価された。

臼山氏は、形容詞述語において長語尾形は「恒常的特徴」を、短語尾形は「一時的特徴」を表示するという定説化された見方を疑問とし、当該の問題に関する学説を入念に再検討し、定説の検証のために、モスクワにおいて65人のインフォーマントによる独自のアンケート調査を試み、その調査結果に基づいて報告し、従来の伝統的な解釈は形容詞述語の語尾形式による表示機能の現象

的一面を捉えた説明にすぎないことを明らかにし、主語となる対象の性質や形容詞そのものの性格が合わせて考えられるべきものであることを提唱した。独自の調査に基づく実証性と説得力が評価された。

野中氏はバフチンの理論の中心的部分をきわめて明確に整理し、〈я〉／〈другой〉と〈я〉－〈ты〉の二系列モデルのそれぞれの成立と意味を分析し、この二つの異なるモデルの原理の上にポリフォニー小説論が過渡期の産物として構築された、とする独自の観点を提示した。発表の明晰性がなによりも高く評価された。

なお、一柳富美子氏の報告「ムーソルグスキイのオペラ《ボリース・ゴドゥノーフ》に関する一考察」、大須賀史和氏の「ベルジャーエフの思想における「認識」の問題」も高い評価を受け、審査の最終段階まで上記三氏の報告と競ったことを、付言しておく。